

教養課程カリキュラムの改定にあたって

林 辰男
倉島 武徳

いよいよこの平成元年四月を期して、教養課程新カリキュラムが始動する。立案当時から関わりを持ってきた筆者らとしては、曲がりなりにもここまでようやく漕ぎつけた安堵感とは裏腹に、新カリキュラムの将来に、一抹の不安を覚えずにはいられない。

ただ新カリキュラムとは称しても、これは、当面既存の経済、経営、外国語三学部のみ適用されるに過ぎず、本年度新設の法学部は、申請作業に間に合わなかったため、旧カリキュラムを運用することになっている。いわば、まだ片肺飛行のまま、見切り発車をする他なかったわけである。

やむをえないことながら、このように全学に二つの教養課程カリキュラムが並行するというのは、いかにも変則的なので、遠からず是正する機会がえられるよう切望している。

いうまでもなく、新カリキュラムは、一朝一夕に成ったものではない。それなりの前史なり沿革を持っている。本稿でも一応その部分に触れて、新カリキュラムの背景となった諸事情をご説明するつもりである。

なお、このカリキュラム検討作業は、教養部が行なったいわゆる「千人人事」と密接な関連を持つが、詳細は別掲

の鷺田教授の稿に譲るとして、拙稿でも便宜上触れざるを得ないので、多少重複する箇所があるかもしれない。あらかじめ鷺田教授並びにお読み下さる方々にお断りしておきたい。

I 新カリキュラムまで

教養課程のカリキュラム全般に対しては、かねてから改訂の要ありという声があり、事実その作業が散発的に行われたこともあったが、概して見るべき成果を収めることなく終わった。むろん、その間、総合科目の設置、教養ゼミナールの卒業単位算入等地道な改革が実らなかったわけではなく、それなりに評価されてよい着想や試みはあったが、在来のカリキュラム体系の大枠を動かすに至らず、その限りでは部分的な手直しの段階にとどまってきた。

これはそれまで部内に底流していた教養部改革論が、結局大きく三つに分かれ、容易に一体化できなかつたという事情にもよっている。

この三つの議論の第一は、もっとも根本的・急進的な形、即ち教養課程が学部の下請け的存在に甘んじるのではなく、むしろ自ら学部昇格し、専門科目をも担当すべきだとする主張である。

次には、この裏返しとでもいふべき考え方で各学部で教養課程を吸収せしめ、それぞれの学部が独自の一贯したカリキュラムを設定する方がよいとする議論である。

しかし、この二案とも早急に実現困難なのは見易い道理である。何故なら、どちらをとるにせよ、これには当然ながら全学的な機構改革を伴わずには済まないため、経営サイドはもちろんのこと、他学部を説得して、その合意と協調をえなければならず、とうてい短日月で解決の着く問題ではないからである。

とすれば、前述の二案に比して、いかに消極のそしりを免れないとしても、現状の組織をひとまず是認し、差し当たりこの枠組みの中での徹底的なカリキュラム改革を試みようという方策しか残らなくなる。

いわゆる学部昇格案については、一時教養課程全体の課題として取り組んだ経験がある。煩を避けてここでは詳述しないが、関係者の努力もあって、素案が提示されたこともあった。それは一応評価するに足るものではあったが、法学部設置を先決とする学内世論に抗しかねて、その推進をひとまず見送るに他ないという厳しい結果に終わった。

しかし、この時の挫折は、教養課程にとって、必ずしもマイナスにばかり働いたわけではない。少なくとも、新学部構想が浮上すると共に、教養課程内部に伏在する諸問題や矛盾が改めて顕わになり、それはカリキュラムの一部改編程度の弥縫策では、とうてい糊塗できないこともまた、いよいよ鮮明になってきたからである。

さりとて、この内在的要因のみでは、カリキュラムの抜本的見直しや改訂が、直ちに円滑に進行したとは思われない。

こうした作業そのものは、新学部創設ほどには困難では

ないにしても、いざ、カリキュラムに手をつけるとなれば、おそらく入り口論や方法論を巡って、議論百出の状態となり、実施段階に至るまでには、図り知れぬ時間と労力を要したことは疑いない。これは専門を異にするメンバーを大量に抱える教養課程の場合、やむをえない特殊事情ではあるが、さらにはカリキュラムそれ自体の改訂に対して、しかるべき提議の場や方法が、制度的に保証されておらず、従来のカリキュラムへの不満なり改革の意志なりが容易に反映されえないという組織上の欠陥にも起因している。その限りにおいては、まず作業に入る前に、ルール作りそのものから手をつけなければならず、いわゆる入り口論や手続きをめぐってで奔命に疲れかねないという、危惧がどうしても残るのである。

さらに、問題を複雑にしているのは、部内のカリキュラムに対する不満や批判の度合いにも、それぞれの教授科目や信条によつて、深淺濃淡に差があり、極論すれば旧来のカリキュラムでも何等支障はないとする立場もありうる以上、必ずしも全員挙つてカリキュラムの全面的改編を望んでいるとまで断言するわけにはいかないというのが、偽らざる実情だからである。

このように、なかなか一本化するのが容易でなく、ややもすれば立ち上がりの遅くなりがちな大世帯では、何等かの形での外圧、といつて悪ければ、外部からの刺激を受けると、それを起爆力として俄かに物事が進捗することがある。その意味で、法学部開設決定は、一種の天佑というべきものになった。われわれ教養部からみれば、これが何故自分達を核とした新学部ではないのかと、いくらかは後味の悪い思いが残りはするもの、ことがそう決したからには、新学部の教養課程も、組織上われわれが担当する他な

いのであつてみれば、好むと好まざるとにかかわらず、それを受けて、増員人事に踏み切る以外にない。

さらには、当時の武田孟学長から全学に発せられた、次のような教務改革の提言もあつた。

昭和六十一年六月九日

全学一致で教育改革への取り組みを

学長 武田 孟

一、教育改革の必要性

昭和四十二年に本学が開学され、早くも二十年目を迎えることとなつた。この間、一度ならず重大な試験に直面したが、教職員一丸となつてこれ乗り越え、今日一定の社会的評価を得るに至つた。

大学の存続と発展は、何にも増して、時代の変化に対応しつつ高等教育にふさわしい内容の充実を目指した日常的努力に依存するものである。その意味において、これまで各学部等がそれぞれの方針に基づき取り進めてきたカリキュラム改革を高く評価するものである。

しかしながら、本学にあつては今日に至るまで、社会情勢が変化し、あるいは大学設置基準（短大設置基準を含め）が改正になり、さらには特色検討委員会からの答申をはじめ、ことあるごとに全学的立場から教育改革の必要性が指摘されてきたにも拘わらず、大学全体としてはこれらを総合的に具体化するための機会を失したままにきたことを反省せざるを得ない。

現在、日本の教育のあり方がその制度を含めて大きく揺れ動いている。教員各位は、教育に携わる者としてそれぞれが抱く理想と大衆化された大学における現実との差の大きさを痛感されているであろう。教育改革はこの現実を直視しつつ、意欲的に学問に取り組む学生を育て

るため、時代の要請にあつた教育内容を実現すると共に、それにふさわしい全学的教育体制の確立を目指すものでなければならぬ。加えて、十八歳人口の急増期を迎えて臨時定員増がはかられている真只中にある一方では、六十八年度以降の十八歳人口の激減期をまじかに控え、私学の危機が叫ばれている状況を踏まえるならば、その対応も急務である。本学が社会変化に耐えつつ未来へ向かつて発展し続けるためには、本学の社会的評価をより一層高める努力をしなければならない。そしてその時期は今において他にはないといえよう。

教育改革の成否は、何にもまして教員の、教育・研究とこの問題に対する取り組み方いかんにかかつている。各位の協力を切望する次第である。

二、教育目的および教育改革の基本

本学の教育目的については、大学の学則では『本学は、「教育基本法、学校教育法および建学の精神」に基づき「個性豊かな人材」を育成し、「人類の福祉と繁栄に貢献する」ことを目的』としており、また短大の学則では『女子のために「実地的な専門教育および職業に重きをおく教育を施す」とともに「人格を養う」ことによつて「よい社会人を育成」することを目的』と規定しているが、

この目的を達成するための方針についてはいまだ全学的議論となったことがない。

幸いにして、去る五十七年七月特色検討委員会第二分科会（札幌大学教育、研究の充実と発展）の答申の中で、次の五点が大学づくりの方針として示されているので、これを参考として議論を深めていきたい。

- ① 多様な個性を伸ばし、充実したキャンパスライフの送れる大学。
- ② ひとりひとりに目標をもたせ、それを達成させる大学。
- ③ 社会の中で生きる応用力、創造力を育てる大学。
- ④ 豊かな感情とたくましい活力を身につけさせる大学。
- ⑤ 教職員と学生、そして学生間の一体感を大事にする大学。

なお次の三点を教育改革の基本としたいので、十分な配慮がなされることを期待する。

(1) 教養課程と専門課程

今までよくいわれ続けてきた学部と教養部の関係、あるいは大学と短大の関係は組織上の問題として捉えられてきたものであり、純粹に教育の面から全学的な意見交換がなされたことはなかった。

この教養課程と専門課程教育の関係の問題は、多くの論者が長年にわたって検討し続けている古くて新しい議論であり、早急に結論の出せるような単純な問題とは思われないが、両者を有機的に関連付ける必要性はかねてから指摘されているところであり、この問題を避けて通ることはできない。したがって、今回の改革に当たってはこの議論を踏まえ、大学設置基準が許容する範囲内において、しかも大学においては四年間、また短大におい

ては二年間を通じて学生を教育するという大前提のもとに実施すべきものと考ええる。

(2) 学部の枠を越えた教育

教育は本来的な目的を堅持し理念を喪失してはならないが、時代の流れに対応し、その時代の必要とする指導的人材の養成をはかることも重要な課題であろう。したがって、今の時代が高度情報化の時代、国際化の時代、あるいは多様化の時代といわれていることを配慮すべきであろう。なかでも多様化の問題は、学生が大学に求めるニーズもまた多様化していることであり、現在の学部の枠にはまった教育のすすめ方に検討を加えるべき要素として捉える必要性を感じる。

(3) 専任教員の相互協力

教育改革は、本学の学生はできる限り専任教員が教育すべきという観点に立ち、学部の枠を越えた協力体制を確立し、現在在籍する専任教員が有効にその職責を全うできるとともに、専任教員の担当比率を向上させて教育に対する責任がより以上に明確になるものでなければならぬ。その際、教育の根幹となる専任教員と研究体制の一層の充実が確保されなければならないが、このことについては、可及的速やかにその内容を提示する考えである。

以上のことから、この度の教育改革は学部等教授会における検討はもちろんのこと、全学的協調のなかで実施されてはじめてその目的を達成できるものである。

三、当面の検討課題

以上を前提として、以下の事項が教育改革の検討課題となろう。

(1) 全学的検討課題

- A 学部等の枠を越えた相互協力体制の確立
- B 教養課程と専門課程科目の有機的關係の確立
- C 学部間専門教育科目の相互乗り入れ
- D ゼミナールのあり方
- E 卒業要件に対する開設科目数の適正化
- F 効果的な時間割編成と施設の有効利用の実現
- G 授業科目ごとの適正履修者数の制度化
- H 新入生教育の明確化
- I 専任教員の充実と他大学等出講基準の制定
- J 研究体制の充実

K その他 (e.g. セメスター制度)

(2) 学部等検討課題

- A 学部教育方針の確立
- B 学部の特色の明確化
- C カリキュラムの整備
 - ① 大学全体および学部教育方針の観点
 - ② 卒業要件と開設科目数の観点
 - ③ 社会的要請および学生のニーズの観点
- D 単位互換制度の運用
- E その他

教養部では、これより先、自主的にカリキュラム検討委員会を発足させていたのであるが、この二つの外部要因が強力なインパクトとなって、作業は一気に進展を見ることがになった。(資料I)

本来ならば、まずカリキュラム改革の部内合意を取り付け、その基盤の上に新入生構想と選考作業を展開するのが筋であり、それがもつとも望ましい形であることは言うまでもない。しかし、例によって時間が切迫して、順を追う進め方が必ずしもできず、カリキュラムの改編と人事を同時並行的に進めるといふ、いささか変則的で強引な方法を取らざるをえなかった。従ってカリキュラム検討委員会のメンバーの中の七名が、人事の作業にも携わることになったが、部内委員会が部長の手を離れて、これほど自律的に活動した前例はあまりない。ここでの経験は、今後の部内運営に一石を投じたと見ることもできよう。

さてこの委員会(正式には、「新入生予備選考委員会」)

は、広く外部に人材を募るといふ決定の下に、具体的な人選を進める一方で、カリキュラムそれ自体の改定作業に深く踏み込んでいかざるを得なくなった。応募者一、〇〇〇名という、予想外の好評を得て、それらの審査にも多大の時間と労力を要したが、極めて多種多様な応募者の業績に眼を通すにつれ、またそれらの評価をめぐって論議を交わす過程で、当時のカリキュラムの不備な点がいよいよ顕わになってきた。

人文、社会、自然三系列を柱とするカリキュラム体系には、長い歴史があり、いわば新制大学発足以来の積み重ねがあつて、それなりの意味のあつた形態である。

しかし、現状の多様化していく社会のニーズや学生の自主性、自律性、自立心の欠如といった気質の変化には、容易に対応できなくなつてしまつていゝるのもまた事実である。

つまり、選考の実践段階で、われわれの評価する人材が、旧来の系列や科目に当てはめにくいこと、手薄な部門を補

うだけの員数合わせに終るのでは、広く江湖に人材を募つた意味がないこと、そのためには、三系列に拘らず、むしろこれを積極的に流動化させて、学際的な科目や人を求める方向に進みやすくするというのが委員会の大勢となつた。

実際には、新採用者全員がこの趣旨の下に選考されたわけではないが、少なくとも将来のカリキュラム像を、ある程度見越して、おそらく多様化するはずの科目を念頭に置きつつ、作業は進められていったわけである。

こうして、昨年暮、難航の末ようやく成立を見た新カリキュラムの骨子は、この間に胚胎したのであり、それを出発点として、最終案に至るまで、およそ五、六回の手直しや肉付けを重ねて練り上げていったものである。

II 新カリキュラムの誕生

新カリキュラムの狙いや構成については、第三十八回東北・北海道地区大学一般教育研究会の全体会議で、すでに筆者の一人(林)が報告したことがあり、いずれそれが活字化された折にでも、合わせて参照していただければ幸いです。

また、一九八九年度本学「履修のてびき」のうち、『教養課程とは』(p.28~30)の稿は、実質的にカリキュラム検討委員会の手になるものであり、ここでも学生向けの形ではあるが、新カリキュラムの特徴や意図するところを解説しているから、筆者らの見解は、全く個人的な感慨を別に、大体この二つの内容に尽きている。従つて、本稿では、多少重複する部分があると思うが、新カリキュラムの中身について、やや立ち入って論じてみたいと思う。

1 四原則の確立

昭和六十二年五月十八日、カリキュラム検討委員会は、

初めて教授会に提案する「教育課程表」の試案を決定し、教授会の批判を仰ぐことにした。その内容は後掲資料の如くである。(資料II)

試案の指導理念となつたのは、後に四つの柱と呼ぶことになる諸原則であり、結局これは成案に至るまで、一貫して新カリキュラムの方向を規制することになつた。

そしてまた、これにともなう実際上の科目編成に関しても、大筋はこの時の提案に従つた形となっている。

その四原則とは、

- (1)必修科目の設置
- (2)コース制の採用
- (3)個別指導の充実
- (4)心身教育の確立

であるが、本稿ではこれに逐次解説を加えながら、新カリキュラムの全体像に及ぶつもりである。

2 四原則の具体化

従来のカリキュラムにおける最大の問題は、教授する側が何を教えようとしているかという全体像が学ぶものにとって、必ずしも明白に見えて来ない点であろう。

系列という大まかな分類が存在し、その枠の中に、例えば哲学、経済学、社会学のような部立てが並存しているものの、その相互関係は不明なままである。学生は、いわば突然羅針盤もないままに荒海の真つ只中に放り出されたも同然で、ひたすら単位の員数合わせに奔るのみということになつてしまう。

改善の道がないわけではない。まず、何よりも系列なり科目なりを、一定の目標の下に再編成し、教授者の意図を明瞭に反映したプログラムを持つこと、もしくは、思い切つて系列や分類を解体して、教える側が得意とし、専門とす

る科目を最大限提供することにより、取捨選択は敢えて学生の手委ねるといふような方法が差し当たり思い浮かぶ。全国各大学のカリキュラム改革は、大体前者が主流をなしていると見てよいが、少数ながら京都産業大学のような後者の例もないわけではない。

このことは、各大学が抱える学生のレベルや知的練度の高低にも左右されるので、一概にどちらが良いとも決めかねるが、少なくとも本学に限定して考えるなら、後者を採用するのは明らかに無理があるといわざるをえないであろう。

むしろ、われわれの考える教養科目の体系を、大まかな形でもよいから、積極的に学生に提示し、進んで手を貸して導入していくべきではないか。これを出発点とすれば、例えば科目のテーマ別再分類・再整理（後に「コース」あるいは「群」として体系化される）、その基礎をなす科目の必修化、さらにこのような趣旨や意図を徹底せしめるための個別指導の強化等の諸方策が、必然的・論理的に派生する。しかし、それはこれらの原則が無制限かつ何の留保もなしに具体化できることを、直ちに意味するものではない。

例えば、旧来の人文・社会・自然三系列から一科目以上履修という基準は守らねばならず、教職課程では修得すべき科目表示が従来通りであるため、新カリキュラムの科目と著しく背馳することは、不必要な混乱を招く惧が生じるので、このかねあいにも配慮しなければならない。

また、あまりに厳密なコース制に固執すれば、他学部からの反発を招きかねない。これにも十分留意する必要がある。

これらのことを念頭に置きながら、前述の試案を用意し、教授会の承認を最終的に得るまでに各委員の私案、委員会

全体の修正案等をつきあわせ、修正を繰り返し、改良を加えていった。

度重なる補正を行わざるを得なかったのは、新カリキュラム編成作業が、法学部の新設業務と同時並行して進められたため、不測の事態に遭遇する度に新たな対応を余儀なくされたという特殊な事情による。

これは教員の新規採用がスムーズに行われた点で、われわれに幸いしたが、逆に科目申請等の制限を大幅に受け、例えば「芸術」の分野で現実の開講科目が著しく少ないなどの不備を生じる原因となり、必修ゼミナールの担当教員のやりくりが予想外に窮屈なものとなった。

しかし、最大の誤算は、新設の法学部について、遂に新カリキュラムが適用できず、当面旧カリキュラムのまま運用するという、いわば二本立ての変則的な形を甘受せざるをえなかった点である。

ここでは、委員会での具体的な審議の内容を詳細に述べる必要はないので、これ以上立ち入らないでおくが、最終案として一本化する直前に各委員の提出した試案は、その間の数多い会合を通じて、各自が到達した一応の結論を示すもので、それなりの資料的価値もあり、最終案と比較対照していただければ、問題の所在や論点も容易に想像がつくものと思われるので、参照していただきたい。（資料Ⅲ）

Ⅲ 新カリキュラムの構造

とまれ、このようにして成立したのが、次のような新カリキュラムである。（資料Ⅳ）

最大の眼目は、新入生に対して、これまでより明確に学ぶべきものとその方向を示したこと、それは一方ではコース（群）を設けて、一定の方向性を与える形で、また教養

ゼミナールの必修化によって、日常の接触を通じてわれわれの意図を知らせるという方法で行われる。

また、もつとも議論の沸騰した自然科学の取扱いに関しても、むしろ積極的に「群」として独立させることにした。

カリキュラム改定に当たって

一 趣旨

旧来のカリキュラムが全体として古めかしくなり、時代のニーズに対応し切れず、各科目個別にはともかく、全体としての目的や関連性においてかけるところが多いので、この反省の上になつて、全面的、かつ抜本的な改革を行うこととした。

二 特色

- a 従来の三分野の利点を生かしつつも、基本的には、これを解体再編成する。
- b その基本理念となるべきものは、いわば人間の探求であつて、その主題の下に、テーマ設定型の教育体系を考えることとする。
- c 上記の基本構想は、狭義には、教養課程それ自体としてある程度完結し得るのみでなく、専門教育の準備段階としても、十分その役割を負うに足りるものと考ええる。
- d それゆえ、初年度生に対する教育は、従来の放任から、必修を増やし、大学に学ぶことの意義、またその方法などについて、積極的に動機づけを行う。
- e 二次以降には、柔軟なコース制を敷いて、何を学ぶか、全体としての展望を与えるものとした。

三 内容

構想中の新カリキュラムの内容は、別紙付表のとおり

新カリキュラム全般の意図するところは、筆者らの私見を述べるより、検討委員会が発表した「カリキュラム改定に当たって」という一文に尽くされているので、ここに再録しておきたい。

である。

その個別の理念、特色は以下に示す。

*基礎ゼミナール（必修）

全学部の一年次生を、二十〜二十五名程度の小クラス編成に分け、教養部教員が単独、もしくは学部教員と共同して指導に当たるとする。

ゼミナールの設置理由は、日常的接触を通じて、初年度生に大学そのものと、そのシステム、履修の実際等を十分理解させ、教養課程における学習を意義あらしめようとする点にある。

一方、総じて国語力の低下が、憂れうべき段階にあるので、理論面での教授だけではなく、各教員が自己の専門を活用する形で、実際の、かつ実践的に国語の表現を併せて指導するものとした。

*芸術

人文科学部門の再編成をする中で、我々はそのうち特に情操面の涵養を期待できる科目を抽出して、『芸術』とし、保健体育と表裏を成して、心身教育の一貫と考えることとした。

従来の科目名、文学、音楽、美術に、あらたに演劇等の科目を加え、人間の芸術活動に関する理論面の教

授のみでなく、創作、表現面でも対応できるように配慮する。

*社会と人間

現代社会が必要としている自立心に富む人間に必須な主体的で総合的な知(教養)の教授である。教授方法は、それをなぜ学ぶのか、いかに学ぶのかという、学ぶ学生の主体的態度に直結するような教授方法をとるよう留意する。教授者は、それぞれ専門領域に限定せずに、幅広く社会と人間のかかわりを説明する。

*自然と人間

文科系大学の志望者は、元来自然科学を学ぶことややもすれば避けたがる傾向にある。それゆえ、ここではその不足を補い、自然の本質をより深く理解するために必要となる、基礎科学的な知識の習得を目標とするが、敢えてこれを必修とするのは、文科系大学において、自然科学を系統だつて学ぶのは、恐らくこれが最後の機会になると思われるからであり、その意味でも極めて重要な科目となるはずである。

*Iコース

Iコースは「国際化の時代」における、国際社会の動向、諸外国の事情、日本と国際社会との関係等を認識させることによって、国際的な視野を広め、国際理解を深めるためのコースである。

ヨーロッパ、アメリカ、アジア、社会主義諸国の現状とかかえている問題を概括的に認識させる科目と、より具体的、個別的なテーマを個別科学的に追求する科目を組み合わせ、コース総体で総合的、学際的な理解に到達させることを目指している。

*IIコース

今日「国際化」が進む一方、地域住民の要求に密着した教育の要請が強く叫ばれており、「地域科学」の構築が説かれている。その実現をねらいとした。

選択必修科目群は、特定地域における自然・社会・人文にわたる諸事象の相互関係を総合的に考察して、地域的人格を理解させるための視点・方法の教授をねらいとする。選択科目群は、より具体的で、生活実感に裏付けられたリアルな教育内容を作り出すことで、学生に受け入れられ、その主体的学習をうながすことをねらいとして、北海道を取り上げ、その総合的理解を助ける。

特に、野外科学を結合し、問題解決学的総合学習の形態を志向する。

*IIIコース

共通課題として「人間とは何か」をかかげる。

この課題を、従来の科目名でいう哲学、社会哲学、経済学、文学、思想史などの領域を通して教授する。しかし、例えば、哲学なら理念という枠組みから、経済学なら欲望という枠組みから課題にせまる手法をとる、結果として従来の枠組みを越すべく大きな意図をもつ。

ここでは、選択必修科目群と、選択科目群との相違は、科目の分科性の程度にある。

*IVコース

いくつかの自然科学の分野からテーマを選び、人間と科学の関わり合いを考えていく中で、人間自身についての科学的な理解を深める。

そのため、選択必修科目群には、人間の科学的理解

に資する科目を主として配置し、選択科目にそれ以外の個別テーマ（たとえば、環境問題など）を扱う科目を配置した。

*外国語科目

本学は、「国際的に活躍しうる人材の育成」を教育目標のひとつにかかげており、そのいっそうの充実をはかる。改革の内容は、卒業要件（単位）からみるとむしろ後退の印象を与えるが、形式化し、外国語を学ぶ

意味を忘れていく多くの学生に、自らが学ぶ外国語を選ばせ、その結果期待できる自発性と短期集中教育との結合によって、実質的な教育効果の向上をはかる。このことが、改革の大きなねらいのひとつである。同時に、目標と能力の向上によって、より多くの外国語を学習しようという意欲的な学生が育つであろうと考え、制限を越えてなお大幅な履修が可能なように時間割等で十分に配慮する。

合わせて議論の的になった必修教養ゼミナールについて、検討委員会の発表した基本見解の変遷と、鷲田委員の実施

試案とを参考までに掲載しておく。

基礎ゼミナールについて

一 その狙い

出来るだけ小規模のクラス編成で、大学教育の輪郭を理解させ、また教養部が施行するカリキュラムの全体像を把握せしめると同時に、いわば学生と教員との個人接触を通じて、人格形成の一助ともなるよう努める。

二 ゼミナールの規模

法学部の新設に伴い、1年次生の総数をおよそ一、二〇〇名内外とみて、ほぼ二案が考えられる。すなわち、一ゼミ当たり二十五名を目安とすれば、教養部教員一人当たり一コマの負担で対処できよう。しかし、よりキメ細かな指導を考えるならば、二十名前後のゼミが望ましいのは当然である。この場合、比較的負担時数の多い体育、語学などの担当者にとっては一コマ、それ以外

で各二コマという構成が考えられる。

ただし、これらの算定は、あくまでも他学部への参入なしと仮定した場合の結果であって、当面は単なる試算に止どまる。

三 ゼミナールの内容・運営

この様な形でのゼミは、個別指導の必要性を叫ぶ過程で、必ず取り上げられるものの、実際上の困難から、他大学においても容易に実施にいたっていないという事情もあって、他に範を求めるとはできない。いわば、われわれが自ら経験を積み、学生と共に学んでいくという姿勢が必要となろう。

しかし、何の目標もなしにスタートしようというのではない。大まかにいって、目的を一に述べたように、大学とはなにかとということを理解せしめることに絞り、その方法として、例えば文

章力、平たく言えば、自国語の読み書きを身につけるよう、各人ができる範囲で指導することが望まれる。

さらに、われわれ自身が率直に互いの経験を披瀝しあい、より良い方法を模索する努力が必要となろう。幸い、実施までには未だ若干日時の余裕もあるので、当委員会は、これが今後の再重点努力目標と考えている。

四 今後の展開

現在カリキュラム体系の改定は、全学的にも行われつつあり、既に他学部との折衝は、公私を通じて何度も試みられている。

その間、学部と教養部との間の矛盾、あるいは認識の相違など問題が山積しており、この調整がこれからの最難関となるであろうことはいうまでもない。しかし、学部においてもそれぞれにニュアンスの差こそあれ、新入次生に対する導入教育の必要性は認めており、われわれの対応次第では、この基礎ゼミを、学部教員と協力して担当する形も考え得る。さらには、教養部の狙い

を積極的に全学に説き、個人のレベルでの協力を求めることも一法であるかもしれない。この場合、特に短大に強く呼び掛けることも考えられよう。

結局、最終的には、他学部との協同の形になるにせよ、取り敢えずは、当教養部の認識を共通のものとし、実際上の混乱を生じないように努めることが急務であろう。

五 結語

以上、基礎ゼミナールの位置付け、その目的、方法など全体に亘って、極めて不十分なまま提案するのは、時間的制約のためとは言いながら、極めて遺憾であるが、これは今回のカリキュラム改定のいわば眼目でもあるだけに、軽々に決定し難い一面があるのも事実である。

従って、まず大まかな骨組みが了解を得られれば、何等かの形で、教養部全員の意見を個別に徴し、それを盛り込みながら何等かの成案を得るよう精力的に審議に努める所存である。

I 教養ゼミナールの理念および性格

すでに各専門学部の関係者各位との会合におきまして開陳されておりますとおり、教養部が責任を負っております教養教育は、各学部の専門教育の単なる予備課程に終始するものではなく、履修学生が予備教育を受け、ついで専門学習に進むために不可欠な基礎知見を与え、同時にこの学習過程の進捗を可能ならしめる論理的思考能力を育成することを内容とするものであります。

しかしながら、上記の基礎知見は単に各専門科学のそれを意味するにとどまらず、大学生としての学問態度・生活態度・志操

心意はいかにあるべきかの知見から始まり、前述の学習過程の進捗を円滑ならしめ促進するためのカリキュラム内容の明確化、仔細にわたる履修方法の教示に至るまでの教育的配慮によって、形づくられるものでもなくてはなりません。

教養部の「教養ゼミナールA」（旧称「基礎ゼミナール」）設置の目的・意図は、第一に上に申し述べましたところにあります。

さて、この設置の主意のうち各専門科学の基礎知見を与えるという部分について、さらに申し述べますと、「教養ゼミナールA」における教育は専門科学の、しかし基礎知見を習得せしめる

という点において、専門教育にたいして〈相対的独立性〉をもつものであります。と申しますのは、数百年前の古典と最新の人間学とが、ひとしく示しておりますとおり、人間は言語によってのみ思考しうる〉のであります。

といたしますと、いかなる専門科学の学習といえども、およそ科学と思想と、思想がもつ論理と、論理にしたがう方法と、その方法によって組成された理論とからなるものであります以上、これらの総体を構成する思考を担う〈論理的能力〉とその思考を文字ないし音声によって「表現」し、他者に「理解」せしめる〈言語能力〉とは〈不可分離〉に育成されなくてはならないということが帰結いたします。

しかしながら、あくまでも基礎知見という立場に立ちます以

II 教養ゼミナールの具体的展開

現状では、遺憾ながら基礎ゼミナールという呼称を予定通り用いることはできませんが、そのために、従来確認してきた内容が左右されるわけではありません。

まず、次のような認識から出発したい。

1 大学という学問の場を理念・実際の両面から理解させるべく努めること。ついで、教養部の指向するカリキュラムの体系を説明し、その中で具体的にどう単位を履修していくか、また大学生として、どういう生活を送るべきか等、いわば『大学生活入門』風な導入部からスタートします。

2 次に想定し得るのは、自己表現の実践です。

これは、まず何を、いかに表現するかという順序になるべきであり、この段階で、ある程度の意志調整が必要であるかもしれません。

上、一専門科学の諸認識を〈素材〉とする方法をとる場合もありましよう。あるいは、日常的な情報伝達をこれまた〈素材〉とする方法をとることもありましようが、一潜在的には各専門学部の学習に不可欠であります〈論理的思考能力〉の訓練ともなる〈言語表現能力〉(各学生の広義の〈思考内容〉〈内部感覚内容〉)と〈感情〉ないし〈情念〉)。「〈外部感覚内容〉は〈表現〉はされえませんが〈理解〉はされえないので除きます」の〈表現能力〉という意味で、また〈自己表現能力〉とも申せます)の育成を懇切に行なうという内容の基礎知見を学生に与える教育が〈相対的独立性〉をもって、教養教育の要として「教養ゼミナール」指導の主眼となるのであります。

つまり、経済・経営・法学等の社会科学系学部と外国語学部では表現すべきものの内容に自ら差異があるので、一律には行きにくい面があります。

従って、テキストを用いる場合は、慎重な配慮が要請されます。この点では、当然新書、文庫、新聞、雑誌などの全部、もしくは部分的な使用が考えられます。

先のテキストの読み込み、そして把握が終了して、ついで実際の訓練へと展開しますが、これには、引き続き同じテキストに依拠する方法があり、あるいは前段階での理解の上に立ち、例えば新たに簡明な英語テキストを用いて、和訳させる。または、古典や近代文を選んで、これを現代語訳させるような方法も可能です。

なお、観点を変えて、さらに実際の指導も考えられます。具体的には様々なシチュエーションを想定し、それに応じた

書簡文を書かせること、放送のビデオ・テープ等を見、かつ聞いて、それを文章化させることなども一法でしょう。

次に、實際上、通年、もしくは半期で前述の内容を展開する場合、時間の配分が、例えばどの様なものになり得るかを、具体的に例示してみます。

1 半期交替の経営学部の場合

この場合は、経営学部の事情からも、教養部は後期を担当せざるを得ません。それゆえ、後期総時間数をおよそ十二、三回と想定すると、次のような時間配分になると考えられます。

- ① 二〜三回 大学生活入門(カリキュラム関係)
- ② 三〜四回 理解力養成(テキスト等を用いて)
- ③ 二〜三回 論理的思考の展開(実際の表現練習)
- ④ 残り 実践面の深化(ディベート、共同発表)

なお、①については、内容が一種のオリエンテーションの側面

を含むだけに、後期に行うのでは狙いが徹底せず、焦点がずれる恐れもありますので、この部分に限って、前期に行う可能性はあり得ないか、経営学部と最終的に調整する必要があります。

2 通年ケース

基本的な観点と狙いは、大筋で1と同じですから、担当の仕方(例えば、通年一人担当か、クロスさせるか)によって、文字通り1を踏襲して差し支えありません。

一方、通年を一名でという場合は、例えば半期ではやや手薄になると見られる、前述の③、④の部分で、ゼミナリステンの個性指導を徹底することができ、テキスト等も半期のケースより、量的にも質的にも余裕のあるものを選定し得ると思われれます。

この場合、担当者と学生との紐帯は当然強まると考えられるので、上述の基本的狙いが守られれば、残り時間は担当者の専門や個性を生かす方向で、その自由な使用に委ねることも、積極的に考えられてよいのではないのでしょうか。

教養ゼミナール(必修)実施要綱私案

《全体的注意》

- 1 学生の調査、研究、発表(口頭、レポート)、討論が授業の主体である。
- 2 各教員の個性が発揮されてよい。しかし、当然クリアーしておかなければならない授業内容はある。
- 3 教員間の経験・情報交換に意をそそぐ必要がある。
- 4 成績は、出席、発表(義務回数設定)の3つを重視する。つまり、単位未取得は、担当教員にも相当の責任がある。

一九八九・二・一五

(K. Washida)

- 5 あるということである。
- 6 ゼミ学生間の横のつながりを保証する措置を考慮する。(コンパ、研修旅行、ゼミ相互の交流)
- 7 二千字詰め原稿用紙を買わず。
- 8 一番大切なのは、定説めいたものを教えることではなく、学生の発表内容に即して、訂正、批判、評価を与えることである。

《前期》

§1 「前口上」

①自己紹介(各自一分、——教員の自己紹介でサンプルを示す)

②名簿(詳しいもの)作成の指示(学生達につくらせる)。

③ゼミとは何か。

④必修ゼミの目的。

⑤連絡係決定の指示。

⑥§2の報告・発表者決定。——参照文献 etc. の指摘は必要(以下、同じ)

§2 「学問とは何か——歴史と論理」

①発表(二人・四百字詰五枚程度)

②補助説明

③討論

④教員まとめ

[*sciencesの歴史と論理を簡単に説明する要あり]

§3 「大学とは何か——歴史と論理」

①発表 ②—④ (§2と同じ、以下同じ)

§4 「大学の現状——a日本と世界 b札幌大学」

① a b ②—④ [* (I) レベルの高い大学をサンプルにするよりは、平均より少し上、札幌より少し上の大学をサンプルにする。(II) 議論の内容には (i) 入学動機 (ii) 就職展望 (iii) 大学の将来 (iv) 地域との接点 etc. を加味する。]

§5 「一般教育と専門教育」

①—④ [* (I) 教養教育の一般的特徴づけを行う (II) 教養教育の重要性 (III) 専門教育との関連での教養教育]

§6 「カリキュラム etc.」

①(新・旧カリキュラムについて) ②—④ [* (I) §6 は、教員がカリキュラム表や履修の手引きにもとづく丁寧な説明が必要 (III) 質問には十分に答える]

§7 「札大の機構 etc.」

①—④ [* 議論の内容 (I) 機構と法則 (II) 試験 (III) 課外活動 (IV) アルバイト (V) 学生相談 (VI) 図書館 etc.—§7も教員の的確な説明が必要]

§8 「学生生活の独自な意味」

①—④ [* 学生生活と学生生活との関連で議論を深める、とくに八〇年代における学生の特徴を重視する。]

§9 「就職とは何か」

①—④ [* work と play の現代的意味変転に注目して、就職の問題性を語る]

§10 「なぜ学ぶのか」

①—④ [* (I) 人生における学問の意義 (II) 学ぶことの問題性—Mich's schooling (III) 知識と技術の意味 (IV) 死を学 etc. を論議の中で問題指摘する]

§11 「コンパ」

[* 学外でもよい。]

§12 「学外研修」

[* 学生に、計画・実施のすべてを自主的におこなわせる]

[注] * §11、§12 は、適当なところに入れる。

《後期》

§1 「前口上」

①自己紹介etc. 前期§1と同じプロセス。

§2 「なぜ実践的な国語能力が必要か」

①④[*読む・発表する(口頭報告、書く)・討論することの意味、§言語能力が人間にとってなぜ不可欠なのかの意味]

*〈Text1〉清水幾太郎『日本語の技術』(ごま書房新書)

〈Text1〉は全五章。一週に一章ずつ消化してゆく。

§3 「(1)文章らしい文章とは何か」

§4 「(2)良い文章を書くための方法」

§5 「(3)日本語を知るための方法」

§6 「(4)話し、聞くための方法」

§7 「(5)読み、考えるための方法」

[注] (I) 清水は達意の文章書きなので、むしろ達意というところにこだわらない教授が必要。

(II) 技術や方法を狭い意味に解しない。

*〈Text2〉丸谷才一『文章読本』(中公文庫)

〈Text2〉は全十二章。その内三章をとりあげる。

§8 「小説家と日本語」

§9 「名文を読め」

§10 「達意といふこと」

§11 「コンパ」

§12 「発表」

「*全員に、四百字詰五枚の小論文を提出させ、発表・討論。このために時間外確保の必要ある。」

[注] *1 Textはその他にも適切なものがある。ただし、清水のは、簡潔・的確・達意で、しかもセンチメントであるという点でいえば、Textとしては資格十分である。

*2 文章をキチツと書くためには、相当程度以上の数の(よい)文章を読む必要がある。

*3 原稿用紙にタテ書きで、万年筆でキチツと書く指導を必要とする。

*4 §8〜§10を別様に組むことも考えている。
ex. §8 「手紙を書く」 §9 「案内書を書く」

§10 「自己紹介文を書くor 推薦文を書く」という具合に、文字通り書く技術実践を試みることである。

*5 長文、短文。論文、コラム、随筆。小説、ビジネス文。etc.ジャンルごとの実践も可能。

*6 コピー文、見出し文、テーゼ文etc.の実践も可能。

*7 《後期》については、実際に、キチンと書かすことが重要なのである。二百字、四百字から五枚、十枚のものまでである。

ex. 1 十一字十二行で「ゴクミ」について

ex.2 二十字で「リクルート事件」の見出し。

ex.3 十五字四十行で「ペレストロイカ」について。

IV 新カリキュラムの今後

検討委員会での審議の間、われわれはあまり他大学の実例を参照しなかった。徒らに理想を追っても仕方がないし、本学の身丈に合った改革は、乏しいながら、われわれ自身の創意に頼る他ないと考えたからである。

それ故、紆余曲折の末誕生した新カリキュラムが万全のものとは到底いうことは出来ないし、またそんな自惚れもない。今後とも衆知を尽くし、新カリキュラムでの体験を生かして、より良いものへと練り上げてゆかねばならないと思う。

さらには、教養ゼミナル必修化にともなう学部との連携に関しても、ようやく経営学部とのみ合意に達し、協同で担当する運びになったが、この成果を大切に育てて、全学へ広げていく努力を怠ってはなるまい。

これらの懸案を着実に解決し、新カリキュラムの欠陥や不備に即応できる態勢を整えることが、今後もつとも重要な課題となるはずである。また、カリキュラム全般に対して、意見を具申できる場や機会を設けることも必要である。

新カリキュラムは、おそらく他大学にもあまり例を見ないユニークな形となっている。そのため、実施段階で逢着する困難については予測し難いものがあるが、幸いにしてわれわれの意図としたところが同僚諸賢のご理解をえられ

ex.4 二十字百行で、書評。etc.

つまり、サンプルは無数にあるということである。以上

れば、容易に克服できると信ずるし、広く学生諸君の支持と積極的な参加が得られるならば、今回の試みは本学の将来のためにも重要な寄与を果たすことになるであろう。

V おわりに

昭和六十一年のカリキュラム検討委員会発足以来三年有余、その間いわゆる「千人人事」の時期を挟んで、それこそ無数の会合を重ね、議論し、交渉し、ようやく今日の形に漕ぎつけることができた。

残された記録も膨大な量に達し、筆者らがここに抄録したものは、そのごく一部に過ぎない。

この機会に記録をたどり直してみても、同僚委員各位の熱意と労力に、改めて深い畏敬の念を抱かずにはいられなかった。また、委員会が活動しやすいように、格別の配慮を賜った前・現両教養部長を始め教授会に対し、衷心より感謝すると共に、われわれに寄せられた貴重なご意見やご要望に、殆どお応えできずに終ったことを遺憾とし、お詫び申し上げます。

また、前例のない大幅な改革であるだけに、事務方の諸氏には、非常な無理を言い、過労を強いた場面も少なくなかったが、物理的に極限に近い時間割を操作して、われわれの苛酷な要求をほぼ盛り込んでくれたことは、まことに

感謝にたえない。

もし、新カリキュラムが曲がりなりにも、一応無事に滑り出し、いくら何でもプラスの評価を受けることができたならば、その功の大半は彼らに帰するといっても過言ではない。

なお、本稿を草するに際して、筆者らの身边が何かと慌

ただしかったため、十分な日時をかけられず、遺漏の多いものとならざるをえなかった。記して、深くお詫びしてきたい。

文中、関係部分の再録を許された鈴木秀勇、鷺田小彌太両先生に感謝します。

資料 I

■教養部カリキュラム検討委員会 名簿

教養部長 平尾三郎 (63.10.1から改選により委員として参加)
 高松法子 (63.10.1から改選により参加)
 委員 奥村重男 博
 奥村武徳 (世話人)
 倉島賢一 (世話人、61.12.1から留学準備のため辞任)
 進藤英明 (世話人、61.12.1から進藤委員と交替し任にあたる)
 鈴木礼暁
 鈴木秀勇 保
 戸木村秀保
 林辰男 (世話人)
 山本裕一
 鷺田小彌太

資料 II

■教育課程表(たたき台)

- ①必修科目の設置
- ②コース制の採用
- ③個別指導の充実
- ④心身教育の確立

その の (自 由 科 目)	①国際関係		②地域研究	
	a	b	a	b
③人間論	a	b	a	b
④自然と環境	b	c	b	c
	c	d	c	d
	d		d	
語学	総合科学入門(学問のすすめ)			
必修	基礎ゼミナール(文章作法) 1年			
	各教員の教養ゼミナール 1.2年			
	保健体育			
①以上	芸術(美術・文学・音楽)			

■ A案

学年	必修	选修
2年	基礎科学 (4) 基礎ゼミⅡ(2) 体育実技 (1) 芸術 (4) 外国語 (4)	
	基礎科学 (4)×3 基礎ゼミⅠ(2) 体育講義 (2) 体育実技 (1) 芸術 (4) 外国語 (4)	
1年		

学年	選 択			
	A 国際関係コース	B 地域論史コース	C 人間学Ⅰコース	D 人間学Ⅱコース
1・2年	必修(8) 国際関係論Ⅰ (日米関係) 国際関係論Ⅱ (日亜関係) 国際関係論Ⅲ (日露関係)	北海道人論Ⅰ (北海道史) 北海道人論Ⅱ (開発地理) 北海道人論Ⅲ (北方史)	人間学Ⅰ (哲学) 人間学Ⅱ (社会学) 人間学Ⅲ (文明論)	人間学Ⅵ (自然哲学) 人間学Ⅴ (環境) 人間学Ⅵ (技術)
	選択(8) 政治学 歴史学 (西洋史) 法学	地理学 歴史学 (日本史) 考古学	社会学 心理学 経済学	人類学 生物学 数学

■ B案

8単位選択必修	国際関係論	地域社会論	人間論Ⅰ	人間論Ⅱ
	I 政治 II 経済 III 社会 IV 文化	I 文明史 II 開発史 III 北方史 IV 生活史	I 哲学 II 社会哲学 III 文明論 IV 文学	I 自然科学 II 動物社会学 III 人類学 IV 行動論
16単位選択	政治学 経済学 歴史学(西洋) 政治史 法学	歴史学 考古学 民俗学 地理学 文化人類学	言語・論理学 倫理学 経済学 思想史(日本) (西欧)	科学技術論 統計学(社会) 生物学 心理学 生態学(エコロジー) 生命論
	指定単科目必修			
	基礎科学(物理・化学・数学)		基礎ゼミ(専門)	
	基礎ゼミ(文章作法)		保健体育	
	保健体育		保健体育	
芸術		フランス語・ドイツ語・中国語・ロシア語		
英語		朝鮮語		

■ C案

	国際関係論	地域社会論	人間論	自由コース
選択必修 4×2 (8)	I 国際政治論 II 国際経済論 III 国際社会学論 IV 文化人類学	I 北方史・北海道史 II 開発論・開発地理 III 民俗学 IV 環境論(生態学)	I 哲学 II 文明論 III 科学史・技術論 IV (自然)人類学	
	歴史学(西洋史) (東洋史) 法学 政治学 経済学	地形学(地質鉱物学) (人文)地理学 考古学 歴史学(日本史) 社会学	言語(学) 論理学 倫理学 (社会)思想(史) 心理学	
選択 4×3 (12)	芸術： 文学、音楽、美術、芸術論 4×1 (4) 基礎科学：数学、統計学、物理学、化学、生物学、自然科学概論 4×2 (8) ゼミナール：I (文章作法・国語)、II (専門) 2+2 (4) 保健体育：体育実技、体育講義 (4) 外国語： 英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、中国語 (12) 朝鮮(韓国)語、スペイン語			

■ D 案

外国語	保健体育	一般	教	育	科	目	教養ゼミナール
		<p>基礎必修科目A *各分野1科目につき必修 〔4単位×3＝12単位〕</p> <p>人間とは何か (例：哲学する人間) (哲学) (哲学) (哲学) (文学) (人類学) (心理学)</p> <p>人間と社会 (例：歴史と人間) (歴史学、西洋史) (歴史学、日本史) (考古学) (地理学) (社会学概論) (政治学) (社会学)</p> <p>人間と自然 (生命と遺伝) (科学、技術と人間) (自然科学概論) (生物学) (数学、統計学) (物理学)</p>	<p>基礎必修科目B *1科目必修 〔4単位〕</p> <p>芸術</p>	<p>コース選択科目(総合科目) *1コースを選び、その中から2科目を選択。1科目について コースを越えて自由に選択 〔4単位×3＝12単位〕</p> <p>Aコース (地域研究1) 北海道の自然と歴史 北海道の自然 黎明期の北海道 北海道の近代化</p> <p>北海道文化論 北海道の生活と文化 北海道の生活と文化 北海道の思想と文学</p> <p>北海道現代論 北海道の政治 北海道の開発 北海道の経済</p> <p>Bコース (地域研究2) ヨーロッパ研究1 (文学におけるヨーロッパ) ヨーロッパ研究2 (歴史と思想におけるヨーロッパ) アフリカ研究 アジア研究 国際関係論</p> <p>Cコース (人間論) 社会的人間論 自然的人間論</p>		<p>〔4単位×2＝8単位〕</p> <p>教養ゼミナールII</p>	
2年						<p>教養ゼミナールI</p>	
1年							

■カリキュラム表 (第3案)

区分	コース		Ⅱコース	Ⅲコース	Ⅳコース
	Ⅰコース				
必修	4	芸術	芸術	人間関係	
	4	自然	人間関係		
	4	社会	基礎ゼミナール		
	4	基礎ゼミナール			
修 外語	8	1 英語 I 2 フライツ語	3 フランス語	4 ロシア語	5 中国語
	3	体育講義、体育実技			
選択必修	8	1 ヨーロッパ文明史	1 生活と文化	1 人間について	1 人間と自然科学の歴史
		2 「アメリカの時代」とその行方	2 未開文明	2 人間の社会性について	2 ヒトの生物学
自由選択	計20科目を 含む12単位以上 の選択必修	3 アジアの中の日本	3 中辺流通	3 文明社会について	3 社会心理学・人間関係論-人間の社会行動-
		4 社会主義諸国の変動	4 生産と流通	4 比較文化について	4 動物の社会行動
		5 社会主義諸国における経営	5 北海道の社会史	5 現代思想との対話	5 社会と医学
		6 日韓関係の歴史	6 北海道の近代化	6 文学と人間の関	6 予測と信頼性-統計学とは何か-
		7 アメリカ民主主義の理念と現実	7 北海道の開発	7 思想と社会の構	7 環境汚染と自然保護
		8 西洋近世近代史	8 北海道の自然	8 欲望と社会の歩	8 エネルギー資源と社会
		9 国際化時代の法	9 北海道の自然	9 思想と価値	9
		10	10	10 人間と価値	10
		10	10	10 人間と価値	10
		10	10	10 人間と価値	10
必修	4	1 英語 II			
自由		1 朝鮮語	2 英語	3 フライツ語	4 フランス語
必修	1	体育実技			

■カリキュラム表(第3-1案)

区分	コース			
	I コース	II コース	III コース	IV コース
必修	4	芸術	術	
	4	自然と人間	人間	
	4	社会と人間	人間	
	4	基礎ゼミナール		
修	8	英語 I、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語		
	3	体育講義、体育実技		
選択必修	8	1、生活文化 2、未開文 3、中央辺境 4、生産と流通	1、人間について 2、人間の社会性について 3、文明社会について 4、比較文化について	1、人間と自然科学の歴史 2、ヒトの生物学 3、社会心理学・人間関係論-人間の社会行動- 4、動物の社会行動
	8	1、ヨーロッパ文明史 2、「アメリカの時代」とその行方 3、アジアの中の日本 4、社会主義諸国の変動	1、北海道の近代社会史 2、北海道の近代文化 3、北海道の自然 4、北海道の自然	5、社会と医学 6、予測と信頼性-統計学とは何か- 7、環境汚染と自然保護 8、エネルギー資源と社会 9、 10、
自由選択	め16単位以上 計24単位以上			
	8単位以外の選択必修科目を含む			
自由	外国語			
	朝鮮語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語			
必修	1 体育実技			

■カリキュラム表 (第3-2案)

区分	コース		I コース	II コース	III コース	IV コース				
	コース	単位数								
必修	4	4	4	4	4	4				
							4	4	4	4
							4	4	4	4
							4	4	4	4
外語	8	8	英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語							
			基礎ゼミナール							
保健	3	3	体育講義、体育実技							
			体育講義、体育実技							
選択必修	8	8	1 ヨーロッパ文明史	1 生活と文化	1 人間について	1 人間と自然科学の歴史				
			2 「アメリカの時代」とその行方	2 未開と文明	2 人間の社会性について	2 ヒトの生物学				
自由選択	10	10	3 アジアの中の日本	3 中央と辺境	3 文明社会について	3 社会心理学・人間関係論-人間の社会行動-				
			4 社会主義諸国の変動	4 生産と流通	4 比較文化について	4 動物の社会行動				
			5 社会主義諸国における経営	5 北海道の社会	5 言語と論理	5 社会と医学				
			6 日韓関係の歴史	6 北海道の先史	6 文学と人生	6 予測と信頼性-統計学とは何か-				
			7 アメリカ民主主義の理念と現実	7 北海道の近代化	7 思想と文学の間	7 環境汚染と自然保護				
			8 西洋近世近代史	8 北海道の開発	8 欲望社会の構図	8 エネルギー資源と社会				
			9 国際化時代の法	9 北海道の自然	9 思想史の歩み	9				
			10	10	10 人間と価値	10				
			国語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、朝鮮語、教養ゼミナール			国語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、朝鮮語、教養ゼミナール				
			必修	1	1	体育実技				

■カリキュラム表(第4案)

区分	コース		コース		コース		コース	
	I コース		II コース		III コース		IV コース	
必修	4	美術、音楽、文学	(芸術)					
	4	数学、物理学、化学、自然科学概論、統計学	(自然と人間)					
	4	政治学、歴史学、社会学、地理学、社会科学概論、哲学、法学 (社会と人間)						
	4		基礎ゼミナール					
外語	6	英語 I、ドイツ語 I、フランス語 I、ロシア語 I、中国語 I						
	3	体育講義、体育実技						
保健	2	英語 II、ドイツ語 II、フランス語 II、ロシア語 II、中国語 II						
	1	体育実技						
選択必修	8	1 歴史学(ヨーロッパ文明史)	1 社会学(生活と文化)	1 哲学(人間について)	1 自然科学概論(人間と自然科学の歴史)			
		2 政治学(「アメリカの時代」とその行方)	2 考古学(未開と文明)	2 社会科学概論(人間の社会性について)	2 人類学(ヒトの生物学)			
		3 国際関係論(アジアの中の日本)	3 歴史学(中央と辺境)	3 経済学(文明社会について)	3 心理学(社会心理学・人間関係論)			
		4 経済学(社会主義諸国の変動)	4 地理学(生産と流通)	4 社会思想史(比較文化について)	4 生物学(動物の社会行動)			
自由選択	計24 科目を 含む 16単位 以上の 科目を 含む 8単位 以上の 選択必修	5 経済学(社会主義諸国における経営)	5 社会学(北海道の社会)	5 言語と論理	5 (社会学と医学)			
		6 国際関係論(日韓関係の歴史)	6 考古学(北海道の先史)	6 文学(文学と人生)	6 統計学(「予測」と「傾向」)			
		7 政治学(アメリカ民主主義の理念と現実)	7 歴史学(北海道の近代化)	7 文学(思想と文学の間)	7 自然科学概論(環境汚染と自然保護)			
		8 歴史学(西洋近代史)	8 地理学(北海道の自然)	8 経済学(欲望社会の構図)	8 物理学(エネルギー資源と社会)			
		9 法学(国際化時代の法)	9 生物学(北海道の自然)	9 社会思想史(思想史の歩み)	9			
		10	10	10 倫理学(人間と価値)	10			
		国語		教養ゼミナール				
		英語 III、ドイツ語 III、フランス語 III、ロシア語 III、ハンガール語 I						

■カリキュラム表 (第5案)

区分	コース	I コース	II コース	III コース	IV コース
必修 必修16単位		芸術 自然と人間	社会と人間	基礎ゼミナール	
選必修	8	英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語の中から1か国語8単位修得			
選必修	4	体育講義、体育実技			
選必修	8	ヨーロッパ文明史 「アメリカの時代」とその行方 アジアの中の日本 社会主義諸国の変動	生活と文化 未開と文明 中央と辺境 生産と流通	人間について 人間の社会性について 文明社会について 比較文化について	人間と自然科学の歴史 ヒトの生物学 人間の社会行動—社会的心理学的アプローチ— 動物の社会行動
選必修	24単位以上 科目8単位を含め	社会主義諸国における経営 日韓関係の歴史 アメリカ民主主義の理念と現実 西洋近世近代史 国際化時代の法	北海道の社会 北海道の先史 北海道の近代化 北海道の自然 北海道の都市	言語と論理 文学と人生 思想と文学の間 欲望社会の構図 思想史の歩み 人間と価値	社会と医学 予測と信頼性—統計学とは何か— 環境汚染と自然保護 エネルギー—資源と社会 自然環境論 脳と行動—人間の情報処理—
選必修		国語	ハンズル語	教養ゼミナール	

■一般教育科目等(第5案)

授業科目	学年			
	I	II	III	IV
芸術		国語 人間について 言語と論理 人間と価値 ヨーロッパ文明史 西洋近世近代史 中央と辺境 北海道の近代化 未開と文明 北海道の先史 生産と流通 北海道の開拓 文学と人生 思想と文学の間		
人文科学 分野		国際化時代の法 社会主義諸国における経営、 文明社会について 欲望社会の構図 生活と文化 北海道の社会 比較文化について 思想史の歩み 「アメリカの時代」とその行方 アメリカ民主主義の理念と現実 人間の社会行動—社会心理学的アプローチ— 人間の社会性について アジアの中の日本 日韓関係の歴史 北海道の都市		
社会科学 分野	社会と人間			

授業科目	学年			
	I	II	III	IV
自然科学 分野	自然と人間	エネルギー資源と社会 北海道の自然 動物の社会行動 ヒトの生物学 人間と自然科学の歴史 環境汚染と自然保護 予測と信頼性 —統計学とは何か— 社会と医学 自然環境論 脳と行動 —人間の情報処理—		
ゼミナール	基礎ゼミナール		教養ゼミナール	
外国語	英語 ドイツ語 フランス語 ロシア語 中国語	*ハンガール語		
保健体育	体育講義 体育実技	体育実技		

■カリキュラム表(第5案)対照表

授業科目(現行)	授業科目(改正案)
哲学	社会と人間
倫理学	人間について
論理学	人間と価値 (言語と論理)
歴史学	社会と人間 ヨーロッパ文明史、西洋近世近代史、中央と辺境、北海道の近代化
考古学	未開と文明、北海道の先史
地理学	社会と人間 生産と流通、北海道の開発
文学	文学と人生、思想と文学の間
国語	国語
言語学	社会と人間 (言語と論理)
音楽	芸術
美術	芸術
法学	社会と人間 国際化時代の法
経済学	社会と人間 社会主義諸国の変動、 社会主義諸国における経営、 文明社会について、欲望社会の構図
社会学	社会と人間 生活と文化、北海道の社会
社会思想史	比較文化について、思想史の歩み
政治学	社会と人間 「アメリカの時代」とその行方、 アメリカ民主主義の理念と現実
心理学	社会と人間 (自然と人間) 人間の社会行動 —社会心理学的アプローチ—
社会科学概論	社会と人間 アジアの中の日本、日韓関係の歴史
〔国際関係論〕	社会と人間 北海道の都市

授業科目(現行)	授業科目(改正案)
数	自然と人間
物理学	自然と人間 エネルギー資源と社会
生物学	自然と人間 北海道の自然、動物社会の行動
人類学	ヒトの生物学
自然科学概論	自然と人間 人間と自然科学の歴史、 環境汚染と自然保護
文化	自然と人間
統計学	予測と信頼性—統計学とは何か— 社会と医学、自然環境論、 脳と行動 —人間の情報処理—
総合科目	
教養ゼミナール	

■カリキュラム表 (第6案)

必修 16単位	芸術 (音楽、文学)				
	自然と人間 (数学、物理学、化学、自然科学概論、生物学、心理学、人類学)				
必修 8	社会と人間 (政治学、歴史学、社会学、地理学、社会科学概論、哲学、法学、論理学)				
	教養ゼミナール				
外語 必修	英 語 I、ドイツ語 I、フランス語 I、ロシア語 I、中国語 I の中から 1 か国語 8 単位修得				
保健 必修	体育講義、体育実技				
区分		群			
選択必修	8	I 群			
		ヨーロッパ文明史 (歴史学) アメリカとその外交 (政治学) アジアの中の日本 (国際関係論) 社会主義圏事情 (経済学)			
選択必修 24 単位以上 科目 8 単位を含め	8	II 群			
		生活と文化 (社会学) 未開と文明 (考古学) 中央と辺境 (歴史学) 生産と流通 (地理学)			
選択必修	8	III 群			
		人間の本质 (哲学) 人間社会の論理 (社会科学概論) 文明社会の構造 (経済学) 比較文化の思想 (社会思想史)			
選択必修	8	IV 群			
		生命の進化 (生物学) ヒトの生物学 (人類学) 人間の社会行動 (心理学) 動物の社会行動 (生物学)			
選択必修		予測と信頼性 (統計学) 環境汚染と自然保護 (化学) エネルギー資源と社会 (物理学) 自然環境論 (生物学)			
選択必修		社会科学諸国における経営 (経済学) 日韓関係の歴史 (国際関係論) アメリカ民主主義の理念と現実 (政治学) 西洋近世近代史 (歴史学) 国際化時代の法 (法学) 民族と文化 (人類学)			
選択必修		国 語 英 語 II、ドイツ語 II、フランス語 II、ロシア語 II 教養ゼミナール			

資料Ⅳ

■教育課程教育課程（一般教育科目等）

1989年度以降入学生（経済・外国語および経営学部）に適用

一般教育科目	16単位			
	芸術	文学、音楽	哲学、論理学、歴史学、地理学、法学、社会学、政治学、社会科学概論	自然と人間
必修	4	4	4	4
	(心理学、数学、物理学、生物学、人類学、自然科学概論、化学)			
外国語	8単位			
保健体育	4単位			
外国語	英語 I 8、ドイツ語 I 8、フランス語 I 8、ロシア語 I 8、中国語 I 8、の中から一つの外国語 8単位修得			
保健体育	体育講義 2、体育実技 2			
一般教育科目	24単位以上			
	I 群	II 群	III 群	IV 群
選択	ヨーロッパ文明史(歴史学) 4 社会主義圏事情(経済学) 4 アメリカとその外交(政治学) 4 アジアの中の日本(国際関係論) 4	生活と文化(社会学) 4 中央と辺境(歴史学) 4 未開と文明(考古学) 4 生産と流通(地理学) 4	人間の本質(哲学) 4 文明社会の構造(経済学) 4 比較文化の思想(社会思想史) 4 人間社会の論理(社会科学概論) 4	人間の社会行動(心理学) 4 生命の進化(生物学) 4 動物の社会行動(生物学) 4 ヒトの生物学(人類学) 4
選択	西洋近世近代史(歴史学) 4 国際化時代の法(法学) 4 社会主義諸国における経営(経済学) 4 アメリカ民主主義の理念と現実(政治学) 4 日韓関係の歴史(国際関係論) 4 民族と文化(人類学) 4	北海道の近代化(歴史学) 4 北海道の先史(考古学) 4 北海道の地誌(地理学) 4 北海道の社会(社会学) 4	人間と価値(倫理学) 4 文学と人生(文学) 4 思想と文学の間(文学) 4 欲望社会の構図(経済学) 4 思想史の歩み(社会思想史) 4	エネルギー資源(物理学) 4 自然環境論(生物学) 4 環境汚染と自然保護(化学) 4 予測と信頼性(統計学) 4
外国語	英語 II 4、ドイツ語 II 4	フランス語 II 4、ロシア語 II 4		

選択必修の4つの群(*)から一つの群を選択し、2科目8単位を修得すること。